

# 【特集】環境と調和した農業を目指して

2007/07/25更新



## 環境と調和した農業を目指して ④

本沢果樹部会

### 独自の防除基準・共選体制を堅持

「本沢ブドウの安全性と品質の良さを、もっとアピールしたい」と話すのは、山形市本沢地区の本沢果樹部会の渡辺君男部会長(57)。メンバー81人のうち71人が「エコファーマー」の認定を受け、部会全体で独自の防除基準を設けるなど、安全性を重視し環境に配慮したブドウ栽培に取り組んでいる。

同地区は“ぶどうの里”として知られ、栽培面積は約52％、生産量は約700ト。主力品種の「デラウェア」が全体の90%を占め、全国各地に出荷している。

#### きっかけは無登録農薬問題

安全性を重視した栽培への転機となったのは、2002年の無登録問題。「果樹に対する消費者の信頼を回復したい。本沢のブドウを安心して食べてもらいたい」と、エコファーマーの資格を積極的に取得し、土づくり・減農薬栽培に取り組むことになった。

農薬の使用量は、地元の「JAやまがた西部営農センター」の指導を受け、県に基準より厳しく定めた「JAやまがた」の基準からさらに2割削減した独自の基準を設定。また、同部会のメンバー全員が生産工程表を部会に提出し、互いの栽培ステージをチェックしている。

化学肥料低減の取り組みとして、堆肥を利用した土づくりと有機質を80%含んだ肥料の使用を実践。剪定枝は破砕機を使ってチップ化し、有機質肥料を加えて園地に還元している。また、空気と肥料を土中に注入する圧縮空気注入機を導入し、排水や養分浸透の効率を良くするなど、積極的に土壌改良に取り組む。



「消費者を裏切らない栽培を続けたい」と話す渡辺部会長。

#### “本沢ブランド”の確立へ、消費者からの信頼がカギ

同部会では、通常のビニールハウス栽培に加え、加温、ビニールの二重被覆、雨よけハウスなど、栽培形態を複数行うことにより、6月下旬から9月下旬までの長時間の出荷を可能にしている。「安定した出荷はもちろんだが、労力も分散でき、消費者に『本沢ブドウ』を印象付けることができる」と大沼裕一副部会長(62)。

1989年から集荷場に選果ラインを導入して、全箱開封による共選体制をと



全箱開封検査し、品質を統一する。

り、品質の統一を図っている。

渡辺部会長は(環境に配慮しながら高品質なブドウの生産を続けてきた。これからも消費者の信頼を得るように努力したい」と話す。同部会では、親子もぎとり会など消費者との交流も積極的に進め、おいしさと安全性をアピールしている。

---

【[トップへ](#) | [バックナンバーへ](#)】